

大学が多すぎる？③

このところ、わが国の社会構造や教育制度、大学のあり方などが問題とされる場合には必ず、「大学卒業者が多過ぎる」、「その能力が低下している」という話が大部分、いや全部であるように思われる。そのようなとき、まったく反対に「もっと多くの大学を」という論文¹⁾に接した。

著者は主として、わが国をイギリスと比較して議論を進めているが、まず数値的な面からは、わが国の大学に相当するものとして、大学の分校や Polytechnic, College of Technology などを考えると大学の数はほとんど差がないこと、大学院段階の学生数はともに約 7000 人で、人口の比率ではわが国の 2 倍にあたることなどが示されている。

また、わが国の科学技術は「優秀な生徒」であって、「国際的レベルにある」だけの場合が多いと述べている。この点は江崎博士のみならず、よく指摘されているところである。さらに、日本人は良く働くというが、わが国の研究者一人あたりの年間論文数はアメリカ合衆国の 1/3、イギリスの 1/6 である。一方にカミクズ論文説なるものもあるが、カミクズの山なしにダイヤモンドだけが見つかることは少ない。すなわち、カミクズ製造者をもっともっと増やせとの主張である（この点は筆者の判断による）。一読をおすすめしたい。

1) 加川幸雄（富山大工教授）：工教だより、第 37 号、（社）日本工業教育協会、昭 51 年 3 月。

安全第一④

わが国における労働災害は、近年件数のうえでは減少の傾向にある。しかしながら、科学技術の発達に伴って、産業界に採用される新技術や新物質が災害の大型化・重症化をもたらし、また業務上疾病の発生病数の増加のみならず、新しい作業態様のもとで労働者の健康障害が生ずるなど労働安全衛生上の新たな問題もおきている。

昭和 50 年における死亡災害は、労働省資料によると 3725 人と対前年比 14% の減となっているが、減少したといっても労働災害による被災者数は年間 115 万人にも及んでいる。死亡者 3725 人を産業別にみると、建設業が最も多く、1582 人で全体の 43% を占めており、また、建設業の死亡災害を起因物別にみると高所からの墜落、転落によるものが最も多く、ついで交通事故、土砂等の崩壊によるものの順になっている。

一方、これの防止対策としては労働省の指導のもとに各起業者および施工者とも万全を期しているのであるが、前述のように建設業が最も多いということは、われわれ土木技術者も関係者と一体となって人間尊重の理念にたって努力を傾注しなければならない問題であろう。

スローガンとしての〈安全第一〉を実効のあるものとして、福祉の時代にふさわしい安全で快適な労働環境の形成に向かって飛躍することが望まれる。

観光道路は伸びる①

夏休みの数日を裏磐梯で過ごした。滞在した民宿は、桧原湖畔の山また山に囲まれた集落にあった。椀づくりの木地師が昔からの生業であったという、その生活は、やはり貧しい。バスも夏で 1 日に 4~5 本しかなく、冬は雪に埋もれる。

持参した五万分の一地図によれば、そこは自動車道路の行き止まりで、陸の孤島ともいうべき地点であった。ところがパンフレットを見ると、道路は米沢まで伸びている。はてと思い調べてみると、書棚から抜いてきた地図は 10 年以上前のものであり、パレーラインと名付けられた猪苗代—米沢を結ぶ道路は、4 年前に完成したものであった。

村人が登山者でもなければ登れないような林道が切り開かれて、観光道路になっているのを見て、私はなにか釈然としないものを感じた。

観光道路が建設されて便利になり本当の意味で周辺は潤ったのであろうか。裏磐梯の見どころ五色沼の美しく変化する微妙な色の配合が、決して人間の手ではうまく組み合わせられないであろうと同じように、ひとたび道路建設によって乱された周辺の自然の生態系を元に戻すことは、容易なことではあるまい。観光開発という名のもとに、ややもすればわれわれ土木屋も環境を無意識のうちに破壊する一翼をになっているのかもしれないことを心しておきたい。